

医療・医薬品産業への期待

～患者・国民のアクセス向上で社会の活力増進を～

読売新聞東京本社
編集委員 本田麻由美

自己紹介

➤ 医療分野の取材担当

1991年に読売新聞社入社。地方支局や省庁担当などを経て、2000年から医療・介護、少子化など社会保障分野の取材を主に担当

➤ 34歳で乳がん診断

局所再発も経験し、3度の手術、放射線治療、抗がん剤及びホルモン剤治療、乳房再建手術など10年以上にわたる治療と仕事を両立

➤ 現在

闘病経験なども踏まえ、医療分野の編集委員として、創薬や先端医療、保険制度、提供体制など、医療関連全般の取材を継続

あすへの考

編集委員 木田麻由美

「生得の強みを生かして、ドラッグロス削減に貢献したい」という思いで、読売新聞社に入社した。医療分野の取材を担当し、2000年から医療・介護、少子化など社会保障分野の取材を主に担当。現在は編集委員として、医療分野の取材を継続している。

ドラッグロス削減に貢献したい。読売新聞社に入社して、医療分野の取材を担当し、2000年から医療・介護、少子化など社会保障分野の取材を主に担当。現在は編集委員として、医療分野の取材を継続している。

創薬国再興 最後のチャンス

新薬の研究開発の流れ

臨床試験体制 国際水準に

創薬エコシステム

創薬エコシステムは、創薬企業、製薬企業、大学・研究機関、患者・市民、医師・薬剤師、規制当局などによって構成されています。創薬企業は、創薬の基礎研究から応用研究までを担当し、製薬企業は、創薬の開発から臨床試験までを担当します。大学・研究機関は、創薬の基礎研究から応用研究までを担当し、患者・市民は、創薬の応用研究から臨床試験までを担当します。医師・薬剤師は、創薬の開発から臨床試験までを担当し、規制当局は、創薬の開発から臨床試験までを担当します。

医療ルネサンス No.8271

ドラッグロス

「何で使えないんや！」

がんや難病など、欧米で承認された新薬の約7割が日本では使えない事態になっている。国内での承認が遅れる「ドラッグロス」と呼ばれる。有効な薬が使えないままに、約4兆円の腫瘍が見つかっている。国際水準の治療を受けられず、患者に不利益が生じている。

三重県伊賀市の喜多功さん(60)も、ドラッグロスに苦しむ一人だ。

「PDGFR-Aエキソン18という遺伝子に変異が見つかりました」

「PDGFR-Aエキソン18という遺伝子に変異が見つかりました」

左: 2024年8月18日付読売新聞朝刊、右: 2024年5月30日付同

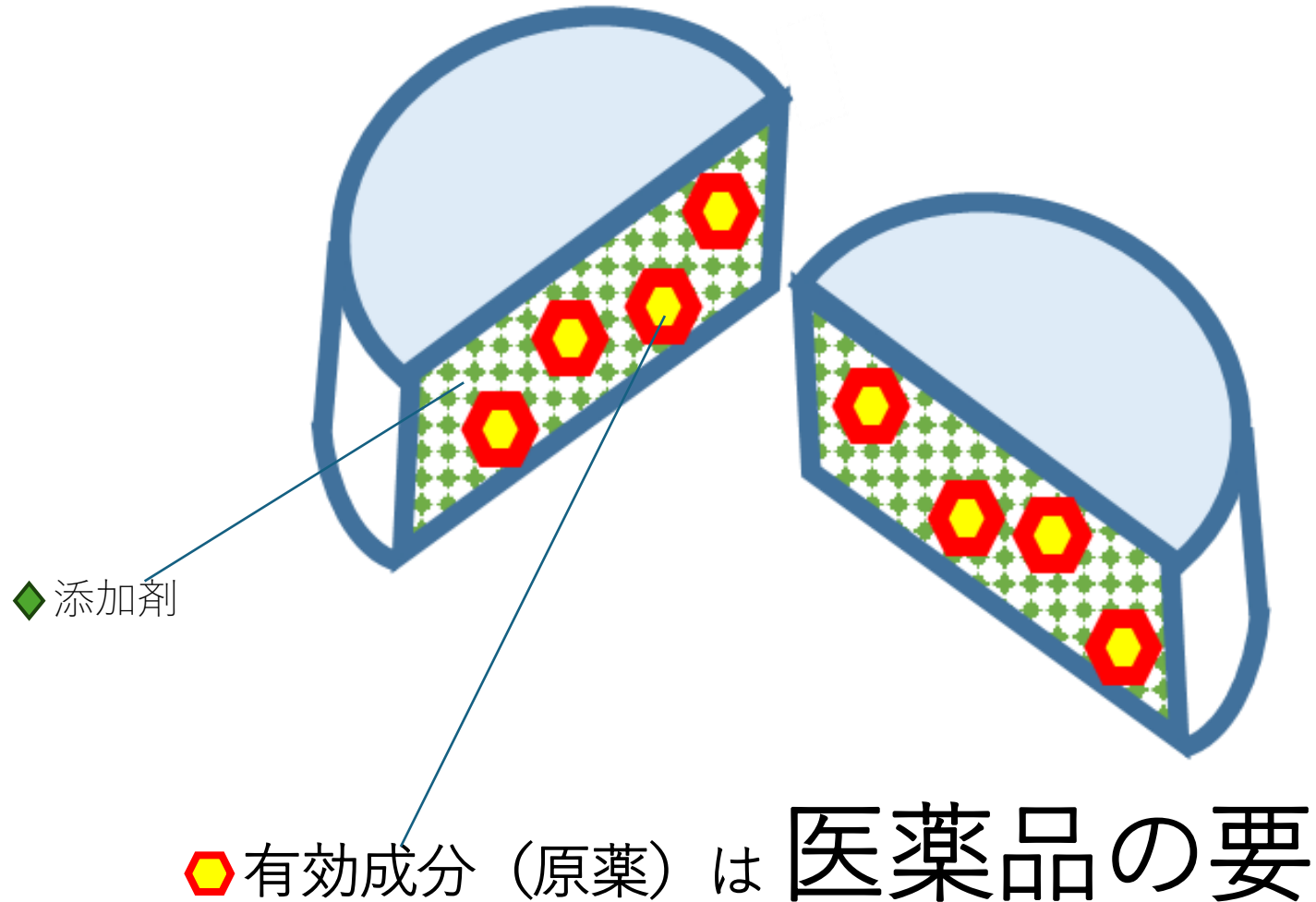
医薬品産業全体を、真の成長産業へ

- ▼成長産業・基幹産業への位置付けに大きな期待
- ▼日本の患者・国民のアクセス確保を
 - ・時代に応じたイノベーションが届くように
[視点] 国内創薬・製造の推進、ドラッグラグ/ロスの解消
- ▼適切な医薬品・ヘルスケア市場の拡大が必要
 - ・公的保険を基本としつつ、多角的な仕組みの検討も
[視点] “大きなリスク”への備えが基本であってほしい
諸外国にある患者アクセスを支援する基金等
- ▼国民自身の健康管理意識の向上へデータ活用等の環境整備を

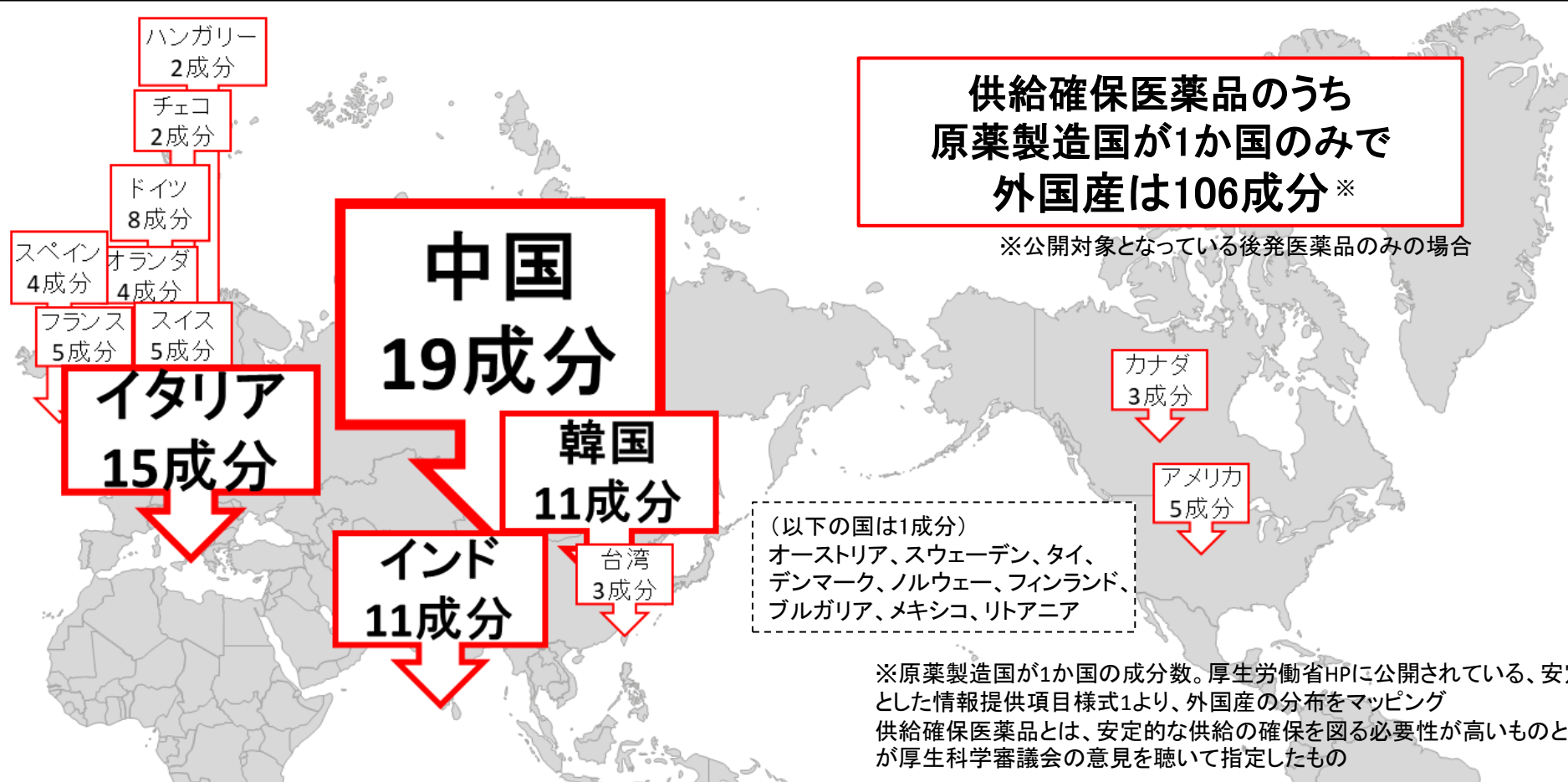
健康寿命・労働寿命の延伸、社会の活力増進につながる

もう一つの視点として…原薬の国内製造力の強化

国民にとっての「経済安全保障」の観点から



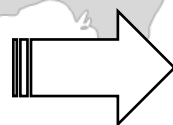
日本における有効成分(原薬)の製造状況と提案



危機管理投資

【投資品目検討のためのヒアリング】

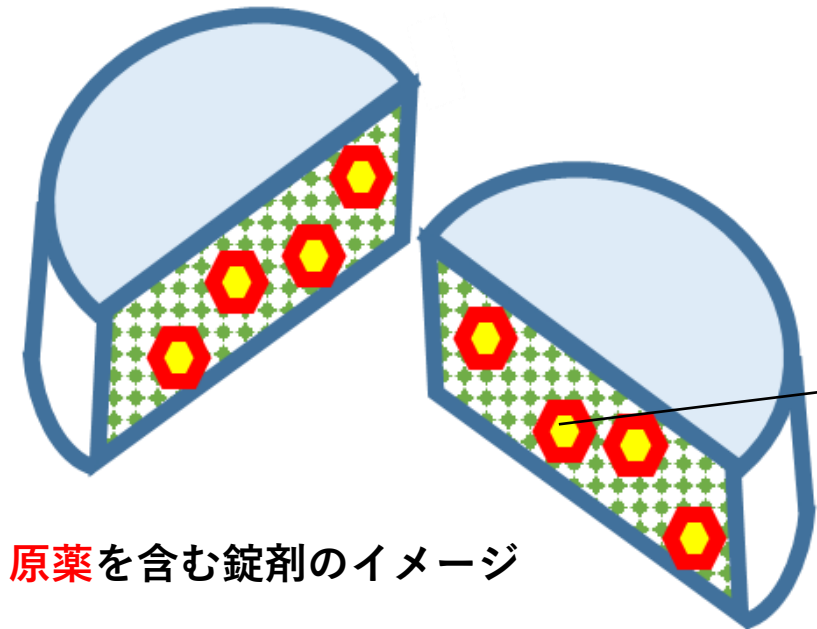
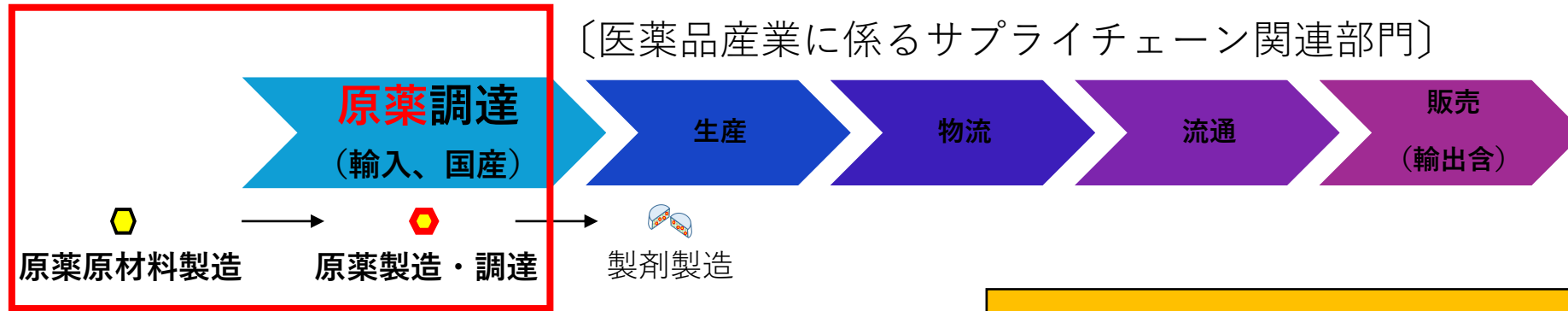
- 化学メーカーを中心に国内製造の可否



原薬の「国内製造力強化」に向けて

- 国内製造不可 → 備蓄手配
- 国内製造可能 → 企業の海外展開支援、設備投資支援、人材育成に向けた環境整備等

(参考)「原薬」の「製造工程」に必要な人財とスキル



【原薬開発】

① 製法開発

- 合成(有機合成、晶析)
⇒ 医薬品、化成品、素材

② スケールアップ^o (工業化)

- 粉体工学(生産系)
⇒ 食品、化粧品、磁気材料、医薬品
- 化学工学(生産技術系)
⇒ 化学、素材、半導体、医薬品

コスト

過度な規制

調達

産業化

国内生産拠点